

れていないところから、骨壺の存在は、ベイトノウの住民がタイェーキッターと何らかの関連性をもっていた事を推測せしめる。ベイトノウ出土の骨壺はいずれも土製だが、無彩色で釉は施されていない。

土器には骨壺のほかに灯油皿、土瓶、鍋、水差し等があり、通常その表面に人、魚、貝、蛇、宝珠等の紋様がぎざまれている。その外、ガルータと思われる粘土製の上半身像が一体と、犬、蛙、巻貝等の土像および土製の弩の鏃、耳飾り、煙管等も発掘されている。

珠数は大半が土製だが、中に若干石造のものもみつまっている。石材には、門の両脇に建てられた守護神2体と、シハ教徒の崇拜対象たるリングと思われるもの、ビシュヌ神の所持品らしき石板等が出土している。

金属製品には鉄（釘、門、蝶番、鏃）、銀（宝珠、旭日、月、後光を刻印したコイン、杯）、金（杯、棒）、鉛（楯）、銅（獅子像、白鳥像、耳飾り、指環、腕環、やかん、棒）、真鍮（鈴）等が発見されている。

人骨は、頭蓋骨をはじめ全身の骨格がそろったもの1体と、散在していた部分的な骨が発掘されている。獣骨は道具として使われたらしく、簪、ペン先、皿等があり、またその外に鹿の角と貝殻が数片発見されている。

以上のような発掘調査に基づき、調査団はベイトノウ城跡について、次のような結論を下している。

- (1) ピュー族固有の骨壺埋葬制やピュー・コインの存在等を考えると、ベイトノウはピュー族の居城であった。
- (2) 出土した焼残りの木材をラジオ・カーボン法で測定した結果、ベイトノウの繁栄期は1・2世紀から4・5世紀の間と推測される。
- (3) タイェーキッターや、ハリンヂーで多数発見されているピュー文字・ピュー語の碑文（Chas. Duroiselle: Robert Shafer）や、仏菩薩の像（U Mya）が、ベイトノウからは1体も出土していない。従って、ベイトノウの住民はまだ文字をもっていなかった。また宗教的にも、仏教は未だ信仰されていなかった。同時にこれらの点から、ベイトノウが時代的にはタイェーキッターよりも古い事が裏づけられる。
- (4) 家屋、城門等建造物にはいずれも著しい焼け跡がみられ、この町が火災で焼失した事は疑いない。恐らく4・5世紀頃に外敵の侵入攻撃をうけ焼き払わ

れたものと思われる。

以上、本書によって我々はベイトノウ遺跡の発掘調査の成果をうかがい知る事ができるが、疑問が全くないわけではない。例えば、旧唐書、新唐書、蛮書、文献通考、唐会要、太平御覧、太平寰宇記等の漢籍史料に表われる「驃」国の記述とどのような関連性をもつのか、あるいはもたないのか。ベイトノウは、タイェーキッターの創始者であるハリ・ビクラマの兄ジャヤ・チャンドラ・バルマンによって建設されたといわれる（Than Tun）が、ハリ・ビクラマは西紀695年に死んでおり（C.O. Blagden）、ベイトノウの滅亡の時期4～5世紀頃との差をどう解釈するのか等々。

今後、全城域にわたる発掘調査が遂行される事を切望すると共に、ピューに関する他の文献、資料との関連性も追求してもらいたいと思う。

ともあれ、本書が、ビルマ政府の古代史研究に対する考えを知る上にも、またビルマの学問的水準の現状を知る手がかりとしても、きわめて有益な資料である事は、確かである。（大野 徹）

Manning Nash. *The Golden Road to Modernity, Village Life in Contemporary Burma*. New York: John Wiley & Sons, Inc., 1965. viii + 333 p.

ビルマについて書かれた本は少なくないが、これまでは例外なしに政治・経済・歴史あるいは言語学の分野のものが多かった。本書のような村落調査のモノグラフは、絶えて久しく現われなかった。従って、まずなによりも、本書が稀少価値をもつ点を強調しておこう。その点で、本書の刊行は、無条件に歓迎されねばならない。本書は内容的にもすぐれている。単に調査内容がすぐれているだけでなく、ことのよしあしは別として、社会人類学の一つの新しいあり方を示しており、興味深いものがある。とくに人類学プロパー以外の社会学者が村落調査をおこなううえで参考になる点を多分に含んでいる。

本書のもとになった調査は、1959年から1960年にかけての1年間、マンダレー周辺二つの村落でおこなわれた。一つはマンダレー西方約23マイルにあるNondwinであり、もう一つは、マンダレー南方7マイルのYadawである。この二つの村は、一方が a mixed dry crop farming community であるのに

たいし、いま一方が an irrigated wet rice community である点で、社会経済的基盤は異なっている。しかし両村の比較の結果は、むしろ、上ビルマの社会文化が地域差を問わず基本的に一様であることを示している。土地の経済、村の政治社会構造、仏教信仰、nat 信仰など、ビルマ村落社会の基本的な局面が克明に検討されている。

しかし、本書は、人類学的調査ではなく、社会学的調査の範疇にはいる感じだ。著者の問題意識の底に働いているのは、近代化とか社会変革とかのきわめて巨視的な抽象理念である。農村社会のなかに、近代化の趨勢に順応しうる論理がどういう形で内在しているのかを探るのが、著者の意図するところなのだ。著者は、異様に鋭敏な頭の持ち主のようである。本書には、きらきらした問題意識が充満している。ある箇所では頭のさえばかり印象に残り、controversial な点を残す部分もあるが、field 経験の豊富さがそれらの欠点を補うかたちで、全体としては高い水準を確保している。

それでも問題点は残る。二つの村落を比較の素材に選び出した根拠は不明確であるし、また、両方に平等にエネルギーが割かれたようにも思えない。それぞれの村落の歴史的背景もさっぱり描かれていないようだ。もっと基本的な事柄をいえば、調査期間が短いこと、しかもその短期間に1箇所5カ月ずつ2カ村もの調査がおこなわれたことは問題だろう。

末梢的な問題は問わぬとしても、最後の conclusion の箇所が、真の conclusion になりえず、妙に気負った社会人類学の本質論議になってしまっている——面白く読める箇所ではあるが——のは感心できない。そのために2カ村を比較して、どういう結論を得るかは、読者の側の宿題として残されている感じだ。この点に満ち足りないものをおぼえる。

これらの欠点にもかかわらず、本書の基本的価値は否定できない。今後、本書に続いて、ビルマの村落調査の成果が刊行されるようには思えない。Nash の名は、1959~60年段階のビルマ農村社会を描き、貴重な資料を提供した学者として長く記憶されることだろう。(矢野 暢)

Donald Eugene Smith. *Religion and Politics in Burma*. Princeton: Princeton University Press, 1965. xiii+350 p.

本書は、ビルマを素材として、宗教と近代政治の複雑な関わりあいを分析した恐らく最初の本であろう。著者の D.E. Smith は、1963年に“*India as a Secular State*”という本を著し、新興地域の脱宗教化の秀れたケースワークとして、評判をとったことがある。“*India*”とこの本とを比較してみると、基本的な問題意識が変わっていないことがはっきりする。しかし、ビルマのほうが社会の状況が単純なだけに書き易かったのであろう。本書は“*India*”以上に明快で、読み易くなっている。宗教と政治という大きな主題を扱いながら、明快な内容になったいま一つの理由は、両者の関連を、抽象的、没時間的に説明せずに、むしろ両者の関係の歴史的な移り変わりに力点を置いたからである。このアプローチは妥当であったと思われる。

本書は、いたって慎重に、ビルマの歴史の変遷を追い、その都度の段階での仏教会の置かれた境遇を克明に検討している。英国植民権力と仏教会、民族主義と仏教、ウー・ヌと仏教、ネイ・ウィンと仏教の関係、あるいは、独立ビルマにおける政治的正統性と仏教、経済発展と仏教の関係など、いろいろな関係が設定され、そしてその個々の事例について明確な判定が下されている。

実証的な心掛けのお蔭で、いろいろ大事な事柄が確認されていて参考になる。独立前のビルマの後期抵抗運動は、基本的に脱宗教的であった点で、前期抵抗運動と断絶していたこと、それにもかかわらず、独立ビルマが仏教精神を充溢させたかに見えたのは、ウー・ヌ個人の影響による特殊な現象であったこと、現在のネイ・ウィン体制は、体質的には仏教と合わないことなど確認したあとで、本書は、ビルマ政治が仏教界の問題をなんら解決しえないこと、逆に、仏教のほうからも、政治にたいして有効な価値提供をなしえていないことを結論づけている。現在のビルマの悲劇は、宗教すなわち仏教が、政治の世界の倫理や行動規範の土台になりえていない点にあるという。

著者は、かつての“*India*”においても、インドの世俗化の趨勢を確認し、“Is India a secular state?”という問いにたいして、“Yes”と答えていたが、本書においても、ビルマの仏教が政治の合理化とか経済発展などの価値となじまない点を指摘し、ビルマの脱宗教化の趨勢を暗示しているようである。